九州大学学術情報リポジトリ
Kyushu University Institutional Repository

寛永古活字版『源氏物語』一斑 : 広島県立歴史博物館黄葉夕陽文庫本をめぐって

田村, 隆
九州産業大学国際文化学部 : 講師

https://doi.org/10.15017/15073

出版情報：語文研究. 105, pp.30-41, 2008-05-20. 九州大学国語国文学会
バージョン：
権利関係：

寛永古活字版『源氏物語』一斑

――広島県立歴史博物館黄葉夕陽文庫本をめぐって――

田村　隆

一

古活字版の『源氏物語』は七種を数える。すなわち、川瀬一馬『増補古活字版之研究』（The Antiquarian Booksellers Association of Japan、昭和四十二年）によって報告された五種に、近時、今西祐一郎『新出本による古活字版『源氏物語』本文の研究』（科学研究費補助金基盤研究（C）（2）研究成果報告書（課題番号１３６１０５０７）、平成十六年三月）によって紹介された二本を加えた、

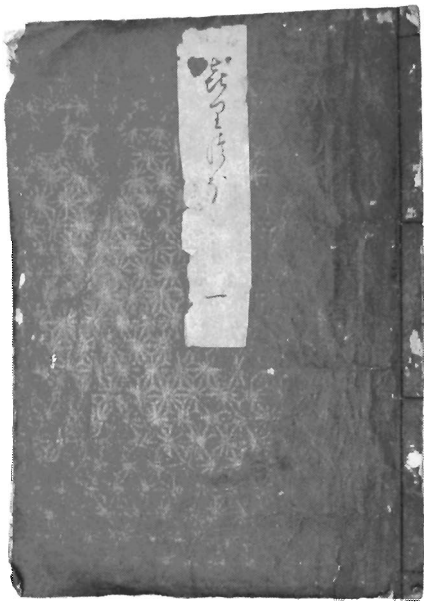
慶長初年刊本
伝嵯峨本
元和九年刊本
寛永中刊本第一種
寛永中刊本第二種（異植字版）
九州大学文学部蔵本
久邇宮家旧蔵本

の七種である。それ以降は、寛永頃の無跋無刊記整版本を経て、山本春正『絵入源氏』（慶安三年跋刊）、一竿斎『首書源氏』（寛文十三年刊）、北村季吟『湖月抄』（延宝元年跋刊）の著名な三書が登場する。いずれも整版による印刷である。

川瀬氏の分類に従って、古活字版『源氏物語』についての論考も近年になっていくつか発表され始めた。伝嵯峨本については伊井春樹「伝嵯峨本源氏物語の本文」（『源氏物語論と

その研究世界』風間書房、平成十四年）や清水婦久子『源氏物語版本の研究』（和泉書院、平成十五年）などに言及があり、最古の版とされる慶長初年刊本については、実践女子大学所蔵本を詳細に検討した上野英子「近世の源氏物語本文――古活字版源氏物語を中心に――」（講座源氏物語研究 第七巻『源氏物語の本文』おうふう、平成二十年）などが備わる。[注1] 九州大学文学部蔵本と久邇宮家旧蔵本、特に後者の久邇宮家旧蔵本の成立については、今西祐一郎「古活字版『源氏物語』拾遺」（永井和子編『源氏物語へ 源氏物語から――中古文学研究24の証言』笠間書院、平成十九年）に詳しい言及がある。[注2] そのほか、和田恭幸「『源氏物語』の版本」（講座源氏物語研究 第五巻『江戸時代の源氏物語』おうふう、平成十九年）には、嫁入本といった文物としての観点から、古活字版の意義が論じられた。

ところで、筆者はこの三月に、広島県立歴史博物館黄葉夕陽文庫所蔵の『源氏物語』について、『広島県立歴史博物館研究紀要』第十号に、「黄葉夕陽文庫蔵『源氏物語』覚書」として報告した。『国書総目録』にも著録されていない一本である。調査の経緯などは拙稿を参照されたいが、冒頭に掲げた各種の古活字版と比較しながら本書を調査したところ、右の分類のうち寛永中刊本第二種とされる大東急記念文庫本と一致した。[注3] 古活字版『源氏物語』の中でも寛永版についての研究はいまだ少なく、本書を手がかりに以下にいささかの考察を試みる。



桐壺巻表紙

二

広島県立歴史博物館のある福山は、近世後期の漢詩人菅茶山ゆかりの地である。菅茶山は天明元（一七八一）年頃に、福山のやや北にあたる神辺（かんなべ）に私塾「黄葉夕陽村舎」を開いた。

寛政八（一七九六）年に福山藩の郷校となってからは「廉塾」と呼ばれ、その講堂や寮は手水鉢や筆洗場もそのままに現在でも国の特別史跡として遺っている。茶山の旧蔵書は黄葉夕陽文庫として広島県立歴史博物館に所蔵されており、そのうちの一点が本稿で扱う古活字版『源氏物語』である。

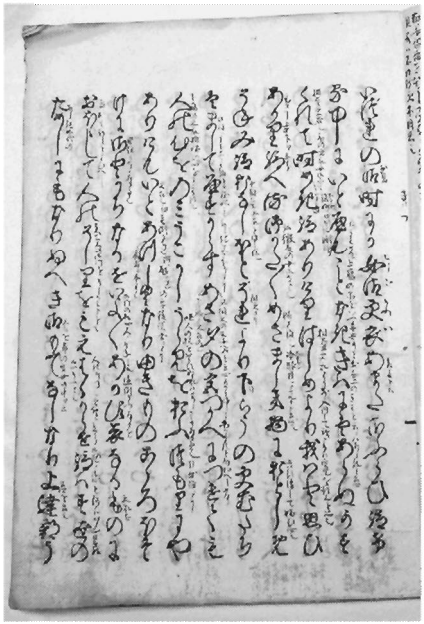
本書は寛永中刊本第二種と見られることを先に述べた。寛永中刊本には二種ある。『増補古活字版之研究』によって、

元和九年刊本に拠って寛永中に翻印せられた一本（十一行、二十一字。字面の高さ約七寸一分）は反つて伝本少く、内閣文庫（昌平坂学問所旧蔵）・久原文庫二本（一は五十五冊、二は五十四冊）・正宗敦夫氏（葵巻より、合十八冊）蔵本を見るのみである。之に両種の異植字版があり、久原文庫蔵二本が之に当る。慶安頃の絵入整版本はこの寛永中刊無刊記本に基いたものである。

と説明される通りであり、博物館本は「両種の異植字版」のうちの第二種本に属することになる。第二種本については、今西先生によって、

該本は前節の寛永中刊本の異植字版という、従来からの位置づけに従えば、本文をはじめとするその内容は、おおむね寛永中刊本に準ずるものと考えてよい。しかし、版面という外的な様相には、微細な差異が無数に見出される。

と指摘されており、同じ寛永版の第一種本や九大本との異同箇所なども挙げられている。



博物館本

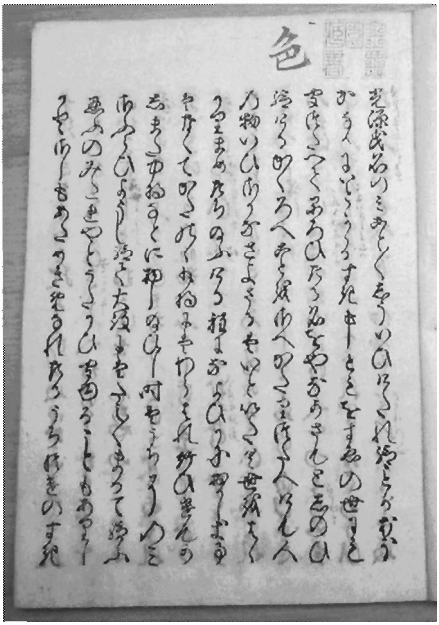
大東急本

また、久邇宮家旧蔵本について、

つまり、久邇宮家旧蔵本は、九大本と寛永版（異植字）の刷り余りを相補的に利用して出来上がった、いわば合成本という可能性が濃厚である。そして、そのような久邇宮家旧蔵本は、当然のことながら九大版および寛永中刊本第二類よりも後の本ということになる。

と指摘され、寛永版第二種は久邇宮本と密接な関係を有することを明らかにされた。

ただし、すでに指摘されている通り、大東急記念文庫所蔵の第二種本は帚木巻が欠けている。一方、博物館本は全巻揃っており、久邇宮本に関する調査を補足し得る。帚木巻においては、全四十六丁のうち、九大本と同一の版は三十丁である。今、残りの十六丁について博物館本を用いて比較したところ、久邇宮本と博物館本は十六丁とも一致した。すなわち、九大本以外の版は寛永版第二種（異植字版）であるという久邇宮本の性格は、帚木巻についても該当することが確認できた。



帚木巻冒頭

全巻揃いの寛永版第二種本を用いることで、このように帚木巻の比較調査が可能になった。これは博物館本によってまず第一に得られる知見である。

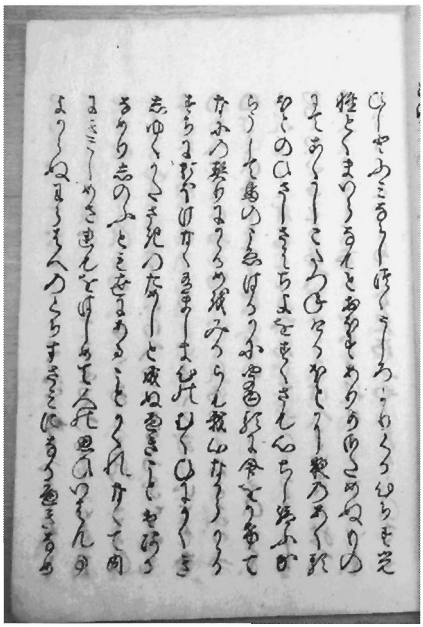
三

加えて、この博物館本は単に大東急本の欠を補うのみではない。両者は同じ寛永版第二種でありながら、完全に同版とは言えないことがわかった。以下、その事実が提起する問題について述べる。

まずは、前稿でも紹介した夕顔巻の一節を取り上げる。夕顔怪死の場面である。博物館本を翻字して掲げよう。

火はほのかにまたたきて、もやのきはにたてたる屏風のかみこゝかしこのくまぐ〳〵しくおぼえ給ふに、物のあし音ひしひしとふみならしつゝうしろよりくる心ちす。光惟とくまいらなんとおぼす。ありかさだめぬものにて、こゝかしことたづねけるほどに夜のあくるほどのひさしさは、ちよをすぐさん心ちし給ふ。

これは前稿でも紹介した箇所であるが、傍点を付した部分が「惟光」でなく「光惟」となっているのを左に掲げる第二十七丁表の図版によって確認されたい。一行目が終わり、改行に差し掛かる所で活字を組み誤ったものと見られる。[注4] しかし、この小さな事実はより大きな二つの問題を示唆する。



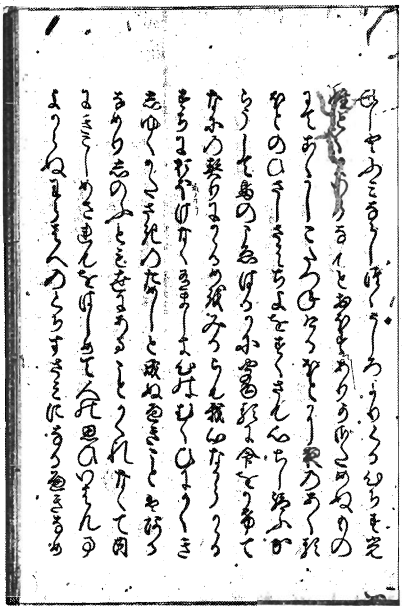
博物館本

その第一は、大東急本の該当箇所を確認すると、こちらは「惟光」と正しく表記されているという点である。同じ寛永版第二種に属しながら、少なくともこの丁に関するかぎり、博物館本と大東急本が全くの同版とは言えないことを意味する。いわば局所的・限定的な異版である。「惟」「光」の二文字を含め使用活字の相違は一切なく、おそらくは、はじめ

大東急本

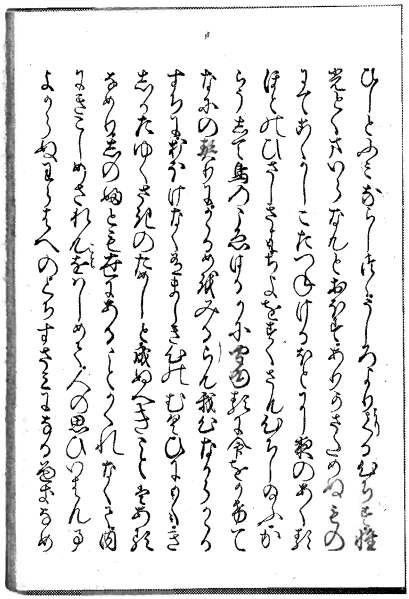
「光惟」と並べてしまったものを印刷の途中で気づいて「惟光」と訂したのであろう。渡辺守邦『古活字版伝説』（日本書誌学大系、青裳堂書店、昭和六十二年）によれば、古活字版の印刷に際しては「一丁が刷り上がると、その活字を、以後の組み版に転用すべく、解版してしまった」とあるから、誤植に気づいて刷り直したのは「解版」の前、それも「光惟」と刷り始めてから「解版」に至るまでのごく短い期間ということになる。「光惟」と刷られたものは訂正の時点で処分されそうなものであるが、結果的には両者とも流布し、ここにおいて寛永版第二種には「光惟」版と「惟光」版の二つのタイプが生じることになった。

問題の第二は、前節で取り上げた久邇宮本との関係である。久邇宮本は九大本と寛永版第二種から成った本であった。その比率はほぼ七対三であるとされる。夕顔巻のこの丁においては九大本とは一致を見ず、寛永版第二種であることははっきりしているのだが、二つのタイプがあるとすれば、そのいずれであるのか。久邇宮本の該当箇所を掲げよう。



久邇宮本

ここにも「光惟」とあるのが確認できるであろう。また、念のため九大本の図版も次頁に挙げておくが、この版面ともやはり異なる。この点からみてもやはり第二種本の中に二つ



九大本

の版面が存することは明らかである。

久邇宮本の製作にあたって九大本と共に利用された寛永版第二種は、夕顔巻のある一丁において「惟光」と「光惟」の二種の版面が見出され、久邇宮本は博物館本のように「光惟」と刷られた方の一丁を利用したことが確認された。誤刻された方を用いているあたり、いかにも刷り余りの利用という感を強くする。このような例が複数あると久邇宮本の素性を明らかにする上で一層有効であろうが、現在のところ、ほかに管見に入らない。

四

寛永版第二種にはもう一つ大きな問題がある。九大本との関連である。今西先生は、若紫巻の第三十六丁について第二種本と九大本が一致するという事実を指摘され、前述「古活字版『源氏物語』拾遺」において、

そもそも久邇宮本と九大本との比較における第二種本の登場は、両本の相違部分につき、久邇宮本が第二種本と同版と目されるということにあり、それ以外に第二種本が関与する要素はなかった。つまり、久邇宮本における九大本との異版部分以外には第二種本との接点はないということである。九大本と第二種本とが同版であるという事例は原則的に存在しないはずであった。

と述べられている。「このような箇所、すなわち久邇宮本と九大本が一致している箇所での、第二種本と九大本との一致は、要するにこの三本の一致ということにほかならない」という事態である。

それを考える上で、博物館本は大きな役割を担う。なぜな

ら、この場合の「第二種本と九大本との一致」とは、厳密に言えば「大東急本と九大本との一致」であることが博物館本との比較で明らかになったためである。すなわち、博物館本の版面は、大東急本のそれとは明らかに異なっていた。それは、同じ「第二種本」においても、博物館本と九大本は一致しないことを意味する。本文こそ異同は見られないが、全体にわたって使用活字が異なっている。

例えば、博物館本に「あやしう〻とみ」とある箇所を大東急本および九大本では「あやしううとみ」と踊り字を使わずに表記したり、その他にも、「思ひないり給そ—思な入給そ」、「かへす〳〵—返々」、「出給ぬ—いて給ぬ」、「名残—なこり」、「行さきの—ゆくさきの」、「あらんこと—あらん事の」、「あそひたまはす—あそひ給はす」、「まきらはし給ふ—まきらはし給」といった表記の異同が見られる。字母の違う活字の使用については枚挙に遑がない。

当然、それに伴って字詰めも異なる箇所が生じる。第三十六丁表の末尾は博物館本では「今は世になき人の」となっているものが、大東急本と九大本では「いまは世になき人」で改行しており、第三十六丁裏一行目も「なとかたらひ」で改行するものが「なとかたらひ聞え」まで含まれたり、同三行目「いとかう思ひな」で改行するものが「いとかう思」で改行する例などが見られる。

博物館本のような版面は、寛永版第一種本をはじめ他に見出せない。前後の丁における活字の仕様から見ても、博物館本は自然であるが、大東急本はその丁のみ印象が異なる。本来の寛永版第二種の版面は、大東急本ではなく博物館本の版面であったと見るべきであろう。[注5] だとすれば、大東急記念文庫本の一丁については、夕顔巻の「光惟—惟光」のように二つのタイプを想定するまでもなく、補填等の理由から九大本が紛れ込んだものと考えればよかろう。

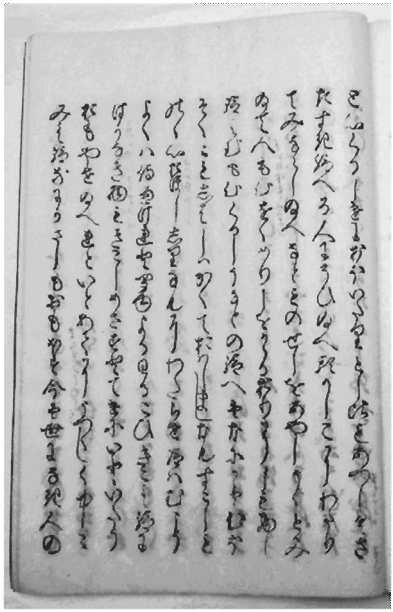
久邇宮本についてはすでに「合成本という可能性」が指摘されているが、三割を占めるその異植字版における大東急記念文庫本においてもまた、補填が行われたことが推測されるのである。合成本を作る素材もまた合成本であるという、いわば入子型の成立事情と言える。

五

大東急本と九大本が同版である丁は、若紫巻の一丁にとどまらない。さらに巻を追って調査していくと、若菜上巻でも九大本との一致を見た。

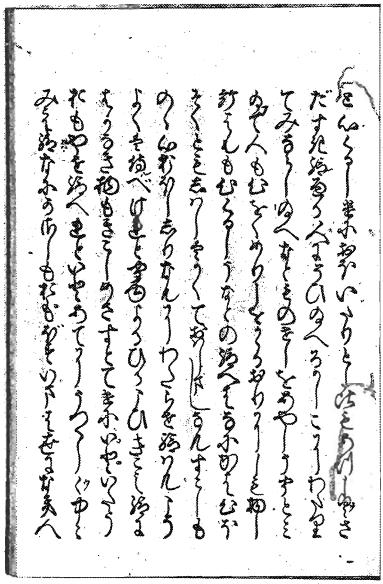
しかも若紫巻のようにただ一丁のみではない。この巻では

〈若紫巻第三十六表〉

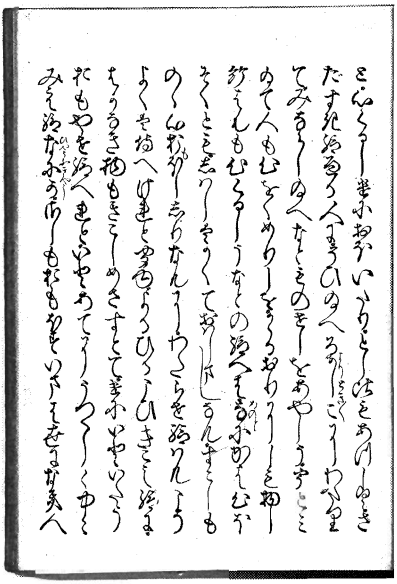


博物館本

大東急本



久邇宮本



九大本

全丁が九大本と同版であった。川瀬一馬『古写古版物語文学書解説』（雄松堂書店、昭和四十九年）や『大東急記念文庫貴重書解題』（大東急記念文庫、昭和五十六年）にもこの点についての言及はないが、一冊全体ということになると、これは混入というよりも、むしろ取り合わせ本といった性格の方が強いように思われる。九大本若菜上巻の余剰分が転用されたのではあるまいか。同じ大東急記念文庫所蔵の寛永版第一種本が、若紫巻のみ異植字版すなわち寛永版第二種であるといった例が思い起こされる。第二節で見たように大東急本は帚木巻を欠いているが、若菜上巻も本来は欠けており、九大本と同版の一冊で補ったということであるのかもしれない。

念のため、久邇宮本に用いられている九大本以外の版面について、帚木巻と同様に若菜上巻も調査した。全百丁のうち、九大本と一致するのは七十五丁で、残りの二十五丁について博物館本と逐一照らし合わせたところ、ことごとく一致した。この巻においても九大本と寛永版第二種の「合成本」という性格が守られていることを意味する。

しかし、九大本の混入という現象はさらに複雑である。今までに見た例とは逆に、実は澪標巻第八丁においては博物館本が九大本と同版であった。大東急本は博物館本とは違う版面を持っており、この丁に関してはこちらが本来の寛永古活字版第二種の版面であろうと思われる。加えて、東屋巻の第二十八丁と第三十八丁の二丁においても、博物館本は九大本と同版であることが確認された。すなわち、大東急本のみならず、博物館所蔵の寛永版第二種においてもまた、わずか三丁ではあるが九大本の版面を見出すのである。因みに、これら三例の久邇宮本はいずれも九大本と一致する。表にまとめると次のようになろう。

巻名＼第二種本	博物館本	大東急本
夕顔　第27丁表	「光惟」	「惟光」
若紫　第36丁	寛永版第二種	九大本と同版
若菜上　全丁	寛永版第二種	九大本と同版
澪標　第8丁	九大本と同版	寛永版第二種
東屋　第28・38丁	九大本と同版	寛永版第二種

寛永古活字版第二種『源氏物語』千八百丁余のうち、広島県立歴史博物館所蔵本と大東急記念文庫本とが異版である丁は、合計で百五丁あることになる。

そのうち、夕顔巻の一丁は、すでに述べたように、わずか

一語のみの異同であるが「光惟」とある。ここは久邇宮本も「光惟」に作っており、微かな痕跡ながら博物館本との関係を明瞭に示唆する。

そして、九大本の一致という問題があった。そのうち、大半を占めるのは若菜上巻の百丁である。この百丁に若紫巻の一丁を加えた百一丁が九大本と同版と認められるものである。残りの四丁のうち、澪標巻の一丁、東屋巻の二丁はそれとは逆に、博物館本が九大本に一致する。

このたびの調査により、久邇宮家旧蔵本のみならず、大東急記念文庫本もまた、百一丁の九大本刷り余りを利用した可能性が確認できた。さらに、本稿で紹介した広島県立歴史博物館所蔵本もまた、わずか三丁のみであるが、九大本の版面が見受けられた。大東急本も博物館本も、共に九大本が部分的に混入した合成本であった。こうしてみると、寛永版第二種は臨時的な製作であったようにも思われてくる。ただ幸いなことに、二本ともに九大本と一致する例は管見に入らず、両者を相補的に用いれば寛永版第二種の全容を窺い知ることができる。

最後に考えておきたいのは、寛永版第二種本と九大本の先後関係である。両者は本文が類似するという今西先生の御指摘があるが、本の製作にあたっても極めて密接な関係にあり、第二種本において足りない丁は九大本によって補われていた。つまり、第二種本の製本時に何丁か不足が生じたとき、九大本の刷り余りを補填できるような状況であったということである。このことは、第二種本よりも先に九大本が成立していたことを示唆しよう。

また、このような第二種本・九大本および久邇宮本の交流から寛永版第一種本が独立していることも注目される。もし第二種本製作の時点で第一種本があったなら、その補填には九大本ではなく、第二種本と異植字版の関係にある第一種本が用いられる方が自然であろう。それを考えれば、第二種本が第一種本よりも先に成立していた可能性をも新たに検討してみる必要があるように思われるが、この点については十分な用意がなく後考を期したい。いずれにせよ、本稿で述べ来たった「光惟」版と「惟光」版の存在、そして百一丁あるいは三丁の異版の混入という事態は、寛永古活字版『源氏物語』がきわめて不安定で、流動的な存在であったことを雄弁に物語る。(注6)

桐壺巻冒頭の図版一葉からもたしかに異植字版と思われるが、未見。本稿で提示した問題とどのように関わるのか甚だ興味深い。また、「朱墨書き入れは特に最初の数冊に多く、湖月抄の注の転載がほとんど」との指摘もあり、『湖月抄』の注を書き入れている点は博物館本と同様である。

（付記）調査にあたっては、前稿の折と同様、広島県立歴史博物館主任学芸員の西村直城氏に御高配を賜った。記して謝意を表する。

（たむら　たかし・九州産業大学国際文化学部講師）

注

注1　他に、実践女子大学文芸資料研究所の「年報」四号、五号、二十二号に同氏による報告がある。

注2　九州大学文学部蔵本については、『九大学報』二、一九九四年（一三三一）および九州大学文学部同窓会の『会報』三十八（一九九五年）に紹介された後、前述の報告書に詳細が発表された。本書については、九州大学附属図書館のホームページに全冊の画像データベースが公開されているので参照されたい（http://herakles.lib.kyushu-u.ac.jp/genji/index.htm）。調査に際し、今西祐一郎先生より古活字版諸版の紙焼写真をお借りした。後に掲げる大東急記念文庫本および久邇宮家旧蔵本の図版もその紙焼写真に拠る。

注3　高木浩明「嵯峨本『伊勢物語』の書誌的考察（上・下）」（『ビブリア』一二二・一二三、平成十六年十月、平成十七年五月）は、嵯峨本『伊勢物語』に散見される誤植について指摘する。今西先生は九大本と寛永版の活字の相違について、「九大本の活字の方が太細の対比が明瞭で文字に勢いが感じられるとともに、輪郭鮮明な点である（この点では九大本は元和版の印象に近いものがある）。それに対して寛永版は、全体に字体が萎縮した印象とともに版面全体に「鈍さ」のようなものが看取されるであろう」（『新出本による古活字版『源氏物語』本文の研究』）と指摘されている。

注4　寛永版第二種は、他に鶴見大学図書館が所蔵することを同大学の貴重書展示図録によって知った。『芸林拾葉』（昭和六十一年）、『古典籍と古筆切』（平成六年）には高田信敬氏による解題が備わり、本書が「寛永中刊本の異植字版である」ことが記されている。夕顔巻・手習巻を欠く。そこに掲げられた